

# 平成24年度 茅ヶ崎市の財務書類4表

現在の地方公共団体の会計制度は、その年にどのような収入があり、それをどのように使ったかといった現金の動きがわかりやすい反面、市が整備してきた資産や借入金などの負債といったストック情報、行政サービス提供のために発生したコスト情報の不足といった弱点があります。企業会計的な手法を取り入れ、それらの弱点を補うのが、国が推奨する「新地方公会計制度」の財務書類4表です。

## 新地方公会計制度の概要

地方公共団体は、一般会計だけでなく、特別会計や関連団体まで含めた連結ベースの財務書類4表(貸借対照表、行政コスト計算書、純資産変動計算書、資金収支計算書)を整備する。

## 対象とする会計

本表で対象としている会計は、地方財政統計上統一的に用いられる会計の「普通会計」です。本市の「普通会計」は、地方公共団体の行政運営の基本的な経費を網羅した「一般会計」に、公共用地を先行取得するために設けられた「公共用地先行取得事業特別会計」を加え、以下を控除した会計です。

- ・「一般会計」及び「公共用地先行取得事業特別会計」の両会計間で重複する経費
- ・在宅介護支援センターなどの建設に要した経費を経理する「介護サービス事業勘定」の経費

## 貸借対照表

「貸借対照表」とは、市民のみなさまが利用する市の施設(財産)、市の所有する現金や債権、資産形成のために投資された資金などが、どのくらいあるのかを示したもので、資産・負債・純資産の三つの要素から構成されています。左右の合計額が等しいこと、現時点の資産と負債などの残高(=バランス)を示していることからバランスシートとも呼ばれます

<b>資産</b> <b>2,495億円</b> 市が所有している財産の内容と金額です。行政サービスの提供能力を表しています。 <b>【内訳】</b> 公共資産 <b>2,312億円</b> 道路、公園、学校、庁舎など 投資等 <b>95億円</b> 基金、出資金、長期延滞債権など 流動資産 <b>88億円</b> 現金・預金、財政調整基金、市税未収金など うち歳計現金 <b>32億円</b>	<b>負債</b> <b>577億円</b> 借入金(市債)や将来の職員の退職金など、将来世代の負担で返済していく債務です。 前年度から約9億円増加しました。
<b>計</b> <b>2,495億円</b>	<b>純資産</b> <b>1,918億円</b> 現在までの世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味の資産です。市の資産全体のおよそ4分の3(76.9%)を占めています。
<b>計</b> <b>2,495億円</b>	<b>計</b> <b>2,495億円</b>

## 普通会計財務書類4表からこんなことがわかりました…

- 市民一人当たりの資産は105万5千円(前年度と同額)
- 市民一人当たりの負債は24万4千円(前年度比で約3千円の増加)
- 市民一人当たりへの行政サービスの提供は23万5千円
- 次年度へ繰越した財源は32億円

## 資金収支計算書

1年間の市の現金の収入(歳入)と支出(歳出)が、どのような理由で増減しているかを、性質別に区分して整理したものが「資金収支計算書」です。経常的収支の黒字分を、大きな資金が必要となる資産整備やそのための借入金の返済に充てています。財務書類4表のうち、唯一現金主義により作成しています。

期首(23年度末)資金残高	33億円
当期収支	<b>△1億円</b>
【内訳】	
経常的収支	83億円
公共資産整備収支	<b>△25億円</b>
投資・財務的収支	<b>△59億円</b>
期末(24年度末)資金残高	32億円

## 純資産変動計算書

市の純資産(正味の資産)が、平成24年度中にどのように増減したかを示します。平成24年度の茅ヶ崎市の純資産は、2億円減少しています。

期首(23年度末)純資産残高	1,920億円
当期変動高	<b>△2億円</b>
【内訳】	
純経常行政コスト	<b>△538億円</b>
財源の調達	536億円
期末(24年度末)純資産残高	1,918億円

## 行政コスト計算書

市の行政活動は、福祉や教育分野での人的サービスや給付サービスの提供など、資産形成につながらない行政サービスが大きな比重を占めています。そのためのコスト(原価・費用)がいくら掛かっているかを整理したものが「行政コスト計算書」です。平成24年度の茅ヶ崎市の1年間のコスト総額は556億円で、市民一人当たりの平均では23万5千円です。

経常行政コスト(A)	556億円
【内訳】	
人にかかるコスト	129億円
職員への給与・退職手当など	
物にかかるコスト	146億円
物品購入、光熱水費、施設などの修繕費、減価償却費など	
移転支出的なコスト	275億円
子ども手当や生活保護などの社会保障給付、各種団体への補助金、繰出金など	
その他のコスト	6億円
地方債の利子など	

経常収益(B)	18億円
行政サービスの利用で市民のみなさまが直接負担する施設使用料や手数料などです。	
純経常行政コスト (A) - (B)	538億円
経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。	

# 平成24年度 茅ヶ崎市の連結財務書類4表

市では普通会計で行っている事業のほかにも、病院事業や公共下水道事業、国民健康保険事業など、市民のみならずと密接な関わりをもつ事業を行っています。

また、こうした市自らが行う事業とは別に、公益法人などの関係団体を通じて行う事業もあります。このように、市の財政は普通会計のみで成り立っているのではないため、真の茅ヶ崎市全体のストック情報やコスト情報を分析するためには、普通会計や特別会計に加え、公営企業会計及び市が一定割合以上を出資している関係法人等までを対象とした連結財務書類4表を用います。

なお、連結に際し、普通会計から連結対象の会計・法人への出資金・繰出金等や連結会計間のサービスの提供/供給などは、連結グループ内での内部取引として相殺消去しています。

## 茅ヶ崎市の連結範囲

### 連結

#### 市全体

#### 普通会計

一般会計  
公共用地先行取得事業特別会計

病院事業会計  
公共下水道事業会計  
国民健康保険事業特別会計  
後期高齢者医療事業特別会計  
介護保険事業特別会計

神奈川県後期高齢者医療広域連合  
茅ヶ崎市土地開発公社  
茅ヶ崎市学校建設公社  
茅ヶ崎市都市施設公社  
茅ヶ崎市文化・スポーツ振興財団  
茅ヶ崎市社会福祉事業団

## 連結貸借対照表

連結対象の各会計・団体・法人をひとつの行政サービス実施体とみなして、茅ヶ崎市全体の資産や負債のストック情報を網羅した財務書類が、「連結貸借対照表」です。

<b>資産</b>	<b>3,490億円</b>	<b>負債</b>	<b>1,120億円</b>
連結ベースでの市の所有財産の内容と金額です。		連結することにより、病院事業や公共下水道事業での借入金などが加わっています。	
<b>【内訳】</b>		前年度と比べ8億円増加しています。	
公共資産	3,230億円		
道路、公園、学校、庁舎、病院、下水道など			
投資等	59億円		
基金、出資金、長期延滞債権など			
流動資産	197億円		
財政調整金、市税等の未収金など			
うち歳計現金(現金・預金)	120億円		
繰延勘定	4億円		
		<b>純資産</b>	<b>2,370億円</b>
		現在までの世代が既に負担して、支払いが済んでいる正味の資産です。	
		連結ベースでの市の資産全体の67.9%を占めています。	
<b>計</b>	<b>3,490億円</b>	<b>計</b>	<b>3,490億円</b>

## 連結ベースと普通会計ベースを比較すると…

- 市民一人当たりの資産は147万6千円(普通会計は105万5千円)
- 市民一人当たりの負債は47万3千円(普通会計は24万4千円)

負債の増加率が資産の増加率を上回っているのは、公共下水道事業での社会資産整備に必要な資金の調達に、将来の下水道使用料収入で回収することを前提に市債を活用していること、病院事業で病院建設の資金として公営企業債を活用したことなどが原因としてあげられます。

## 連結資金収支計算書

「資金収支計算書」の考え方を連結対象の特別会計や法人などにも適用し、連結グループの収支の実態を表すのが「連結資金収支計算書」です。現金主義により作成するため、病院事業などの発生主義を採用している会計・法人等は、取引事実の発生を根拠とした金額ではなく、会計年度内に実際に収入・支出が行われた現金の額へ決算書類の組み替えを行っています。

期首(23度末)資金残高	106億円
<b>当期収支</b>	<b>14億円</b>
<b>【内訳】</b>	
経常的収支	116億円
公共資産整備収支	△26億円
投資・財務的収支	△76億円
期末(24年度末)資金残高	120億円

## 連結純資産変動計算書

連結ベースでの市の純資産(正味の資産)が、平成24年度中にどのように増減したかを示します。平成24年度の茅ヶ崎市の純資産は、135億円増加しています。

期首(23年度末)純資産残高	2,235億円
<b>当期変動高</b>	<b>135億円</b>
<b>【内訳】</b>	
純経常行政コスト	△686億円
財源の調達	821億円
期末(24年度末)純資産残高	2,370億円

## 連結行政コスト計算書

「行政コスト計算書」の考え方を連結対象の特別会計や法人などにも適用し、ひとつの行政サービス実施体とみなして作成したのが「連結行政コスト計算書」です。国民健康保険や介護保険など、市が行う福祉目的事業の中には特別会計で行われるものも多いため、「行政コスト計算書」と比較して、移転支的コストの割合が高くなっています。また、経常収益が「行政コスト計算書」と比較して大きくなっているのは、企業会計や特別会計が原則受益者の負担で賄われるべきものだからです。

<b>経常行政コスト(A)</b>	<b>1,140億円</b>
<b>【内訳】</b>	
人にかかるコスト	182億円
職員給与・退職手当など	
物にかかるコスト	227億円
物品購入、光熱水費、施設などの修繕費、減価償却費など	
移転支的コスト	701億円
国民健康保険事業や介護保険事業などでの社会保障給付、各種団体への補助金など	
その他のコスト	30億円
地方債の利子など	
<b>経常収益(B)</b>	<b>454億円</b>
使用料・手数料などに加え、市立病院で支払う医療費、国民健康保険料、介護保険料なども含まれます。	
<b>純経常行政コスト</b>	<b>686億円</b>
<b>(A) - (B)</b>	
経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。	